

哲學研究

第二百八十六號

第二十五卷
第一冊

文化の本質と教育の本質

本村素衛

—

教育の結果人は教養を得る、と考へられてゐる。ところが教養 *culture* は文化 *Kultur* と共にその語原を *cultura* に發してゐる。一方また *culture* と意味を同じくする *Bildung* は、もともと形あるものを作ることを意味し、ここからしてこの言葉はまた教育と同義に用ひられる陶冶の意味を擔つて來る。然るに文化は常に自然との對立に於て理解せられ、自然がおのづから成るものであるに對して文化とは特に人間に依て作られたものとして、そこにその本質を持つものと考へられる。さうすれば *culture* と *Kultur* とがその深き根源に於て何らか密接な關係を暗示してゐるやうに、*Bildung* と *Kultur* とも亦それらが共に形作ると云ふことに内面的なつながりを持つ點で何か本質的な聯關を持つもののやうである。

教養のない人とか無教育な人とか云ふ場合、それは通常、人間として知るべきことを知らず、心得て居るべきことを心得てゐない人に對して下される評價である。従て教育のある人、教養人とは、人間として知るべきこと心得べきことを心得知つてゐる人を意味する。かかる評價の仕方から云へば教育とか教養とかは獨り人間にのみ關する事柄であつて、ここにそのこの本質的な限界が看取せられると同時に、教育に對する否定概念は無知であり、無知とは即ち無教育の別名に他ならないのでなければならぬであらう。併しそれかと云つてここからして若し人間を陶冶し人間性を開發することの本質的な意味を單に理知の側面に限局するならば、それは甚だしき性急であり明白な抽象でなければならぬ。開發は特に人間生命にかかはるのであり、このことはそれ自身に於て、全人間性を對象とすることを妨げる何ものをも持たないからである。全人間性と云ふとき併し我々はそこに單に全精神性を意味せしめることもできない。人間は本來同時に身體的存在である。この點に於て人間は却て自然に屬し、身體的行動に依て自然と交渉することに依て初めてその内的精神的生命を具體的に生きるところの存在である。それ故人間の全體的性格は、身體を通して内なる生命を外へ行爲的に表現すると云ふことに、而もこのことをみづから知つて爲すと云ふことに於て、把へられるのでなければならぬ。ここに實踐性が成立する。實踐とはその具體性に於ては自覺性と行爲に依る廣義の形成性とをその本質的契機とするものでなければならぬのである。従て知の具體的な意味も、他方身體のそれと同様に、その實踐性への聯關に於て初めて成立するのでなければならぬ。ソクラテスは知の本質をかかるとしての聯關に於て把へた。彼れに於ては無知はかかる知の缺如であり、そしてかかる知への開發が知を要するものとしての哲學者の眞の使命であつた。プラトンに於ても哲學の窮極の目標、——知を要求する生活の窮極の目標は、同じく實踐的な人

間の陶冶に在つた。よきポリスの人を仕立て上げることが人間性開發の具體的な意味に他ならなかつた。孟子が「得天下英才而教育之」(盡心章上)と云ふとき、その教育の意味も單なる知的開發に限局されてゐるのではなく、却て優れて實踐的な性格を陶冶しいだすことの他にはなかつた。——このやうに考へて來れば教育とは人間を作ること、他ならないのでなければならぬ。みづから人間性を開發し實現することのできるやうな實踐的人間を作ること、それが教育の本來の仕事でなければならぬ。

ところが文化とは人間性の實現に他ならないと考へられる。廣義に於ける人間の行爲が文化を生みいだす。文化はこの意味に於て人間の作つたものであり、この點に於てそれは自然から本質的に區別せられる。さてさうすれば、教育は人間を作り、そして人間は文化を作る、と云ふ聯關が成立して來なければならなくなる。文化の根柢には教育が横つてゐるのでなければならぬ。併し纏つて考へれば教育は却て文化活動の一つに他ならない。教育が文化を生むやうに、また逆に文化が教育を生むのである。歴史はこのことを實際我々に示してゐる。文化と教育とは單に相伴つて起るだけではない。文化が興ることに依て教育は盛となり、教育の進歩に依て文化は廣まり促進され一層創造的になる。兩者は相伴つて起るだけではなく、更に互に限定し合つて相互を高め廣める關係に在るのである。併しそれにも拘らず教育は常に文化の一部分であつて、逆に文化が教育の一部分であると云ふ關係は成立しない。さうすれば文化は自己の内部に自己を生みいだす働きを藏してゐるものと云はなければならぬであらう。文化は自己の内に人間を作る活動を含み、これを媒介としてみづから作るのである。文化と教育との關係は大體このやうに展望づけることができるのではないか。ここに我々は考察の目標を置く。兩者のかくの如き聯關は進んでその真相に於て如何やうに

把握さるべきであるか。この問題は、文化の本質と教育の本質との究明を通して、恐らくおのづから解けて行くことが期待される。文化の本質は何であるか。かく問ふことから出發しよう。

二

文化は人間が作るものとして、おのづから成つて行くことを本性とする自然に對し、そこにみづからの本質を持つと上に云はれた。文化が人間に依て作られると云ふことは、人間の生命が文化に於て自己を作り現すと云ふことに他ならない。このことは併し必然的に内と外との聯關をその構造原理として持つてゐるのでなければならぬであらう。現すと云ふことは内を外へ出すことに他ならないからである。併し内に於て既に出來上つてゐるものを外へ出すと云ふなら、それは單なる取り出しであり、或は單なる出現であつて、決して作り現しと云ふことにはならない。作り現すと云ふことは、外にみづからを現しただすことに依て初めて内が具體的になり、初めて内がみづからの眞實の姿をそこに於て持ちそこに於て知ると云ふことでなければならぬ。かくの如き聯關に於てある内は、從て單にそれ自身としては却て自己の眞實性を持たず、外に現れることに依て初めてそこに眞實の自己を確保し自己を具體的に實在せしめるのである。それ故かかるものは、かくの如き意味に於て、外に於て却て内を持つもの、外が即ち内であることを本來的な在り方とするもの、と云はなければならぬであらう。内と外とは併しともと對立し矛盾する互の他者である。自己を作り現す存在とはそれ故本來矛盾の統一に於て在る存在と云はなければならぬ。内と外との辨證法的自同性を原理としてかかるものは存在するのである。人間の生命が文化に於て自己を作り現すと云ふとき、人間

的生命はそれ故かくの如き辨證法的存在として把握されるのでなければならぬ。かくてまた、一面主體に屬し内の性格を擔ふと同時に他面自然に屬し外の性格を擔ふところの身體は、それ自身恰もかくの如き辨證法的存在として内と外とを媒介する實在的原理となり、文化はかくの如くにして身體を媒介原理として生みいだされるのである。——ここに、序ながら、文化と技術との必然的關係に對する展望が開かれて来る。技術はもともと單なる理性に關するものではなく、その本質に於て、熟練に依て主體的に働く自然の理法に他ならず、かくの如きものの成立する場所は身體の他にないからである。道具や機械も、兩者の意義と構造とに於て如何なる區別を有するにしても、兎も角身體との聯關を無視してはそれらの本質を把握することは不可能でなければならぬであらう。——さて、内と外とのかくの如き聯關を我々は表現と呼ぼうと思ふ。文化が人間の作り現したものであると云はれるとき、文化はそれ故人間の表現なのである。併し作り現すと云ふことが、上述の如く、既に出來上つてゐるものの單なる取り出してなく、内が自己に對立し自己を否定する外に於て却て自己を具體的に持つことであり、作ると云ふことはかくの如く内を否定する外への聯關に於て初めて可能であるとするならば、作り現すと云ふことは、一層明確には、形成的表現と呼ばれることが更に適當であるだらう。

文化が表現であると云はれるとき、我々は併し表現に關して三つの段階を區別しなくてはならない。第一は内面が直接に身體的外面に現れる場合である。そのとき我々の内的生命は直ちに身體的表情や身體的動作となつて自己を表出する。手の舞ひ足の踏むところを知らないやうな激しい歡喜、身をゆさぶつて悶え泣く口惜し涙、悲しみに絶え入るやうな忍び泣き、——さう云ふやうな激しい感動の現れを思ひ起す迄もなく、少し注意すれば我々の顔や肢體は

常にその時々、内的状態の端的な現れであることを知ることができる。だから驚きの嘆聲や困却の溜息は、それを漏らさないで置くことが容易でないばかりでなく、時と場合に依ては人々は内心をおしかくすために一方ならぬ技巧を弄せねばならぬことがあり、而も空とぼけや白ぼくれの不自然さのために、それがそれ自身一つの表情となつて却て本心を見破られると云ふやうなことが日常屢、起つてゐる。場合に依てかう云ふ不自然さが必要となると云ふことは、我々の身體が常に内心の正直な現れであることを本來的な在り方とすると云ふことを裏から證據立てて居るものにならないのである。このやうに身體に直ちに現れないではやまない内的生命は、主體的であると同時に一面自然に屬し自然の内部に喰ひ込んでゐる身體を介して、更に外界へとその現れを求めて行く。ここに外に於て自己を作り現すことが起つて来る。が併しこの表現活動は今の段階には屬さないで、次に述べようとする第三の段階に屬する。併し乍ら唯今の段階に屬する限りに於て尙、内的生命は身體を超えて外へ、——世界全體へ擴つて行く。悲しみの目には月も花も一切が悲しみを現し、喜びの目には風も太陽も一切が喜びに舞ふ。ここでは大自然が直接に云はば身體的表情となる。唯表現手段としての身體の客觀的活動に媒介せられてゐないが爲めに、自然の表情は單に主觀的直接的に止まり、客觀的の公共的となつてゐないのである。形成はここでは主觀性の限界を出でない。而も尙内を外に現はし、外に於て却て内を見ると云ふ表現的生命の本質的性格を、上の限りに於てどこ迄も失つてはゐないのである。自然は屢、この聯關に於て（但し固よりこの聯關に於てのみでは決してないが）詩歌のモチーフとなる。たとへば萬葉の歌人達が物に寄せて思を述ぶると云ふ如き場合、それが特に象徴的な表現の段階に迄進んでゐない際には、かくの如き主觀性の立場に於て自然に即して直接に自己の内面を見てゐるのである。ここでは云はば客觀が主觀のうちに没落して

了つてゐる。

第二に、我々は外に現されたもの、作られたものを表現と呼ぶ。ここでは従て表現とは表現活動の所産を意味する。内的生命はこのとき外的成態に於て自己を客觀的に保持する。客觀化された精神がこの段階に於ては表現の意匠とするところに他ならないのである。表現的生命はここでは前段階に於ける如き主觀性を脱却し、内に對する外なるものとしての客觀的成態に於て却て具體的なる自己を獲得する。このことは表現が本來内を外に現すことであり、外に於て却て内を持つものである限り、表現の本質的意味そのものの前段階からの必然的な發展であるのでなければならぬ。表現的生命は前段階に反してここでは却て客觀のうち自己を没落せしめて了つてゐるのである。藝術家に取つて作品は手を離れてゐる以上これを如何ともすることができないやうに、一般に表現的成態は主體に對する否定としてこれに對立し、それ自身に於て客觀的に獨立的なものとして成立する。ここではそれ故主觀性はそれ自身の積極的意義を全然喪失し、單に見るものとして表現的成態の前に立つと云はなければならぬ。内はここでは外に依て否定されてゐるのである。

かくの如き状態は併し表現的生命の抽象であり偏倚であることを免れない。我々は前に文化を、人間の作り現したものととして、表現的生命の具體的形成として、理解して來た。そして實踐を、その廣き且つ具體的なる意味に於て、人間性の自覺的形成に他ならないと規定した。文化が人間の生命の形成的表現であるならば、それ故實踐とは文化の形成であると云はなければならぬであらう。形成的表現としての實踐にはこのやうにして外への形成性と、同時にその自覺性とが本質的契機として含まれてゐるのである。然るに上の第二の段階に於ては主體性は客觀のうち自己

己を喪失し、自己の積極的意義を否定せられなければならなかつた。第一の段階が外を内に埋没し、外への形成性と云ふことを積極的に持ち得なかつたとすれば、第二の段階は恰もこれと反極的に外のために内を奪取せられて内を積極的に發揮し得ないのである。第二の段階はこのやうにして第一の段階と共に抽象と偏倚とに於て成立するものと云はなければならぬ。云ふ迄もなく兩段階は共に表現的存在の二つの在り方を示すものとして、いづれも外に於て内を現すと云ふ本質的性格をはづれることができるのではない。併し乍ら内と外とのかくの如き原理的聯關の地盤の上に於て尙兩段階の上の如き相對立する偏倚と抽象とが成立するのである。

これに反し、第三の段階は、兩者の統一として成立し、そこに初めて表現的存在の具體的構造が示される。第一の段階から云へば第三のそれは到達することのできなかつた外の契機を積極的に獲得したものであり、第二の段階から云へばそれは無力となつてゐる主體性の恢復である。第一の段階に於て内と外とが直接的に結びついて居り、第二の段階に於てそれが分離して外が内に對して獨立的となつたとすれば、第三の段階は分離を媒介としての結合の恢復であり、結合の即自態がその對自的展開を経て即且對自的な結合に發展したものに他ならないのである。ここに於てはそれ故對立する抽象と偏倚との底にかくれてゐた地盤としての内と外との表現的聯關が、抽象を吞了し偏倚を脱却してみづから積極的具體的に高まり出るのであると云ふことができる。

かくの如き聯關はそれでは内と外との如何なる交渉に於て成立するであらうか。自覺と云ふことが、その純粹なる形態に於ては、我れが我れの内に於て我れを知ると云ふことに於て成立し、自我はかくの如く知る主としての我れとこれに否定的に對立する知られる客としての我れとの分離と對立とを媒介として初めてみづからの自同性を成立せし

めるとするならば、自覺的表現に於ては内と外との間に恰もかくの如き構造聯關が成立するのでなければならぬであらう。内としての表現的主體は、外を媒介として初めて自己を知ることができるのである。併し單なる觀想的主体としてでなく、特に表現的なる主體がこのやうに外を媒介として自己を知ると云ふことは、單に觀想的に外を眺めることに依て可能であるのではなく、外へ自己を形作り現すことに依て、即ち外に於て作ることに依て、自己を知るのでなければならぬ。ここではそれ故に知る自己は即ち作る自己であり、そしてそれは作られるものを媒介として初めて自覺することができるのである。今やそれ故に主と客、内と外とは、抽象と偏倚とに於て在るのではなく、兩者共にその積極性を維持し、その對立と矛盾とのままに而も相即統一を形作り、かくの如くにして表現的生命を成立せしめるのである。それはそれ故に内と外との辨證法的自同性に於て在るものと云はなければならぬ。我々はここに表現的存在の具體的構造を見る。表現はその具體性に於ては、内と外との單なる直接的結合に於て成立するのではなく、作られたものとしての成態に於て成立するのではなく、内と外との對立を媒介とする動的交渉に於て作られるものを作ることにそのうちのうちに成立するのである。ここに初めて表現は自覺的形成として成立することができる。

——而もかくの如き形成的表現が本來的に自覺的でなければならぬとすれば、かかるものの形成がその活動に於て自覺的でなければならぬのみでなく、かくの如き自覺的形成そのことがまた反省的にも自覺的であるのでなければならぬ。そこにかくの如き自覺的表現的存在がみづからに關して持つ反省的自覺が、即ち自己の存在に關する理論が成立する。哲學の本質はそこに成立するのでなければならぬ。我々の目下の分析も亦從て恰もこの面に於て成立するのである。

三

このやうに、自覺的な形成的表現は外を媒介契機とすることに依て初めて具體的に可能となる。表現が眞に自覺的であると云ふことは外を媒介にすると云ふことであり、然るに外を媒介にすると云ふことは客觀的に形成すると云ふことに他ならない。従て、自覺すると云ふことと形成すると云ふことは、表現的生命に於ては畢竟一つのことにはならないのである。自覺の具體性はその形成性のほかに求めることはできないのである。表現的主體は外を回つてみづからに歸る迂回的存在であると云ふことができる。

表現的主體がこのやうに外を媒介とすることに依て初めて表現的自覺に達すると云ふことはそれでは一體何を意味するのであらうか。外はもとも内ではなく、兩者は互に對立し矛盾するものとして、互に否定的な關係に立つ。而も外は内なくして外であることはできず、また内も外なくして内であることは不可能である。それ故兩者は互に否定し合ふのみでなく、互に他と否定的に媒介し合ふことに依て初めて内であり外であることができるのである。兩者を成立せしめるものはこのやうにして否定的媒介に他ならない。否定的媒介を原理とし根柢としてそれに基いて初めて内と外とはかかるものとして成立し得るのである。それ故表現的存在が内と外との交渉に於て成立し或は表現的生命が内を外へ現すことに於て成り立つと云ふことは、表現的生命が本來否定的媒介を原理とすると云ふことを意味するに他ならないのである。表現的世界は否定の原理に依て成立し、みづからのうちに否定性を本質的な原理として持つものでなければならぬ。

併し否定が媒介原理であると云ふことは如何なる意味を持つのであるか。否定そのものが媒介原理であると云ふことは、媒介契機としての内と外との他にこれを媒介する原理として否定の機能を擔ひ且つ發揮する何等かの實體的第三者があるのではないと云ふことでなければならぬ。かくの如き實體的有があるならば、否定そのものが媒介原理であると云ふことにはならないからである。この意味に於て否定的媒介は有の媒介ではなく無の媒介であり、表現的世界は無を媒介原理として成立するものと云はなければならぬ。

否定そのものが媒介原理であると云ふとき、媒介は唯端的なる否定に依て、即ち否定することそのことに依て行はれる。併しこのことは否定の對象の存在しないところでは不可能でなければならぬ。それ故否定が媒介原理であり無が媒介原理であると云ふことは、必然的に有を媒介さるべき契機として豫想し、かかる媒介契機としての内と外とを否定的に媒介することそのことに於てみづからの原理性を維持するものと云はなければならぬ。無の媒介は唯有に即してのみ行はれ、有を離れていづこにも具體的且つ現實的に無の媒介は成立し得ないのである。媒介するもの存在しないところでは媒介原理そのものが自己を喪失する他に道がない。併し同時にまた内と外とは否定的媒介に依るの他に内であり外であることはできない。これらのものは媒介されることをほかにして、それ自身で單獨に自體的存在であることはできないのである。——このやうに分析して來れば表現的世界はそれ自身のうちに否定の原理を含み無の媒介に依て成立すると同時に、無の媒介はまた内と外との表現的聯關そのものに於てみづからを具體的に示すものと云はなければならぬであらう。表現的世界はかくの如き構造聯關に於てみづからを否定的に媒介する世界、自己自身のうちに自己自身を否定的に媒介する存在、——否定的自己媒介的存在であると云はなければならぬ。

さうすれば内と外との對立が先づ在つてそこから兩者の交渉的聯關として表現の世界が成立するのではなく、却て内と外との對立は表現的存在そのものうちに於ける對立的契機に他ならないのでなければならぬ。ところで表現的生命に於ては内即ち主體は外を否定的に媒介することに依てのみ自覺的となるものであつた。無の媒介は然るに内と外とを表現的に聯關せしめる媒介に他ならなかつた。さうすれば主體に於ける自覺は結局無の媒介そのものの自覺に他ならないのでなければならなくなる。主體は表現的世界そのものの内部に於けるその自覺的契機であり、表現的存在はうちに自覺面を持つところの存在として成立するのである。媒介する者なき媒介としての無の媒介は表現的主體に於てその自覺性を保つのである。さてさうすれば文化とは今やかくの如き存在の自己形成として把握されるのでなければならなくなるであらう。そして個々の主體はかくの如き自覺面の各々の現實的自覺點に他ならないのである。それがもともと形成的表現的存在の自覺點であるが故に個體は本質的に身體的存在でなければならぬのである。具體的なる實踐即ち文化の自覺的實現はかくして身體的個的主體から始つて行く。

さて内と外とが上の如き意味に於て、本來否定的自己媒介に依てみづからを形成的に現して行く表現的世界の媒介契機として成立するものとするならば、更に進んで兩者の相互媒介的な表現的交渉は如何なる動的聯關に於て結ばれて來るであらうか。表現的自覺は外を媒介にすることなしには成立することができなかつた。それでは第一にその外とは如何なるものであるであらうか。それは表現的主體を取りめぐる外として表現的環境であるのでなければならぬ。かかる環境は如何なる本質を持つてゐるか。普通、主體に對する外と云ふとき、人は自然界を考へ、そしてそれは一定の客觀的法則に依て動くそれ自體獨立した世界として取られる。かかる自然は併しもともと觀察の對象として

單に眺められる自然であり、観想的な態度を以てその法則が單に理論的に追究せられるだけの自然に他ならない。かくの如き自然の認識も、單に受動的な模寫的關係に於て成立するものでなく、却て認識主觀の實驗的な問ひ入れに對する自然からの應答として、實驗の裝置を手段とする身體的技術的な問ひに對する自然からの答へに於て成立すると云ふ點に於て、その限り表現的性格を擔ふものには違ひない。が併しここでは尙外界へ向つて作りかけると云ふ主體の積極的態度は現れず、却て單に外をそのあるがままに認識することを本質的な態度とすると云ふ限りに於て、その限り自然認識は勝義に表現的聯關に立つものとは云はれ得ない。之れに反し、外が形成の素材として取られるとき、内と外とは單なる理論的觀想的關係を脱して形成的聯關に立つと云はなければならない。何故なら、素材とは本來形成的主體に對する外であつて、形成的主體との聯關を離れては外の素材的性格は全然成り立ち得ないからである。人間の具體的存在性が自覺的な形成的表現性に在る限り、素材的外界はそれ故單なる理論的對象としての自然よりも一層具體的であると云はなければならない。單なる木や石や土に對して材木や石材や土地が一層具體的であり、前者は却て後者の抽象的形態であるやうに、一般に理論的把握の對象としての自然は素材的自然の抽象面に他ならないのである。さてそれならば素材的自然が我々が求めてゐる表現的環境であるのであらうか。古來理想主義的立場に立つ人は自然を素材として受取り、イデアの實現に對する實質的原理としてこれを把握して來た。文化理想主義の立場からは自然は原理的に常に文化價值實現の素材として考へられてゐる。

素材的自然は併し眞實に表現的主體に對する外と呼ばれるに値するであらうか。形成に對する素材の性格は、一面形成に對する障礙者であると同時にまたその保持者である點にある。素材は先づ以て形成の行手に立ちふさがる否定

的存在として現れる。形成とはイデアを飽く迄具體的に見窮めんとする表現的意志が、このふさぎを除いてイデアを明るみに登さんとする戰に他ならない。ここでは形成に出でないと云ふことはそれ故主體が否定されると云ふことを意味するものでなければならぬ。逆に形成的に外を否定し返すことに依て初めて主體は自己を維持しそこに具體的な自覺を持つのである。このとき素材は却て形相の擔ひ手となり、その客觀的實在的な保持者となる。障礙と保持とのこの二つの矛盾的契機を同時に持つところのもの、それが素材であり、そしてここに素材の可塑性 *Bildsamkeit* が成立する。可塑性が素材の本質的な性格であり、このものは従て反抗と歸順、敵意と友情との相即を自己の本性とする。併し單なる可塑性は未だそれ自身に於てみづからを表現するものと云ふことはできない。表現的環境が併し眞に表現的な外として表現的主體に對するものであるべき限り、かくの如き外は單に受動的なる可塑性に止まるのではなく、みづから積極的に主體に向つて自己を表現して來るものであるでなければならぬであらう。——かくの如き外を併し我々は持つであらうか。

ところが我々を取りめぐる外は却て實は常にかくの如きものである。我々は屢、直接にして具體的なるものを通り抜けて却て抽象的なるものを掴みなれてゐる。直接我々が出逢ふ外は決して單なる素材の世界ではない。我々は却て常に外から表現的に呼びかけられ、表現的に要求されてゐるのである。外は常に内を外へ引き出すべく咬かし迫つて來る。たとへばミケルアンゼロに取つて大理石の偶然的な一塊がその制作意欲を咬り且つ一定のテーマへ限定したやうに、或は土地や山が屢、企業家を誘ふやうに、或はまた一定の社會的狀勢が政治家や社會改革家に呼びかけるやうに、主體を取りめぐる外は先づ以て表現的に主體に呼びかける外なのである。素材的外は却てかくの如き表現的外の

抽象面であるに過ぎない。石材は素材であるよりも先づ以て建築へ唆きかける聲なき意志である。外はこのやうにして單なる素材ではなく却て云はば汝的な性格に於て成立するものと云はなければならぬ。——外のかくの如き性格は併し一體何に基くのであるだらうか。

それは人間の存在が本來自覺的な形成的表現的存在であり、かかるものとしての内は外を形成的表現的聯關に於て媒介とすることなくしては具體的に自覺的であることができないと云ふ點に在るのでなくてはならない。外に於て却て具體的な自覺面を持つ表現的世界に於ては、本來表現的性質を持たない外と云ふものは在り得ないのである。素材的な外も理論的な外もかくの如き表現的な外の抽象面として初めて成立するものであるに過ぎない。形成とは既述の如く、本來表現的世界の否定的自己媒介に他ならず、そしてそこに文化の生産があるのであつた。ところでかくの如く否定的に自己を媒介すると云ふことは、取りもなほさず外に於て自己を作り現すことを媒介にすると云ふことに他ならない。ここでは從て作られたものが常に主體の活動の媒介となるのでなければならぬ。作られたものとは然るに客觀化された表現的意志に他ならない。作られたものはそれ故その本質に於て客觀的精神であるのでなければならぬ。まさしくそれであるが故に、そして外は決して單なる自然であるのではないが故に、外は常に主體に呼びかけて來るのである。——併しさうは云つても表現的外は悉くが現實に作られたものであるであらうか。人跡未踏の山、未だ航海者が舵を動かさなかつた海。成る程これらの類のものは未だ曾て現實に人の力の及んだものではないに違ひない。併しそれにも拘らずそれらが本來表現的世界に屬してその外界を形作る限り、從て主體との間の表現的聯關を遊離した單なる抽象の外でない限り、みづから主體に向つて表現的に訴へて來るものでなくてはならないのである。

未踏の山はその未踏性の故に登高者の心をそそり、見窺めのつかない水平線の彼方は却てその未知性の故に航海者達の荒膽を魅惑する。ここにかくの如き外の、單なる客觀的自然から區別さるべき客觀精神的性格が、即ち單に存在しみづから成るものであるのではなく却て本來作られたものに特有であるところの性格が成り立つのである。單なる自然は可塑的自然のうちに、可塑的自然は表現的自然のうちに止揚されてゐると云ふことができる。具體的な外は常に表現的な外として直接我々の前に在り我々を取りめぐつてゐるのである。自然律に依て合理化されてゐる自然を客觀的と考へ慣れてゐる人々には、かくの如き表現的自然は恐らく主觀的と見えるかも知れない。併し客觀性がものと具體的な眞實の姿を意味し、主觀性はこれに反してその抽象的把握を意味するならば、表現的自然に對して自然科学的自然こそは却て主觀的であると云はなくてはならないであらう。

表現の外は上の如くにして呼びかける外である。さうすればこれに對する内は先づ以て聞く主體でなければならぬ。併し單に聞くことはその限り受動的であつて能動性を持つとは云はれない。聞かれた内容は語られた内容であり、從て主體は聞くものである限り本質的には外の云はば延長であるに過ぎず、かかる主體は從てその限り本來の主體性を喪失してゐるものと云はなければならぬであらう。聽き取ることはその本質に於て受け取ることであり、觀想的消極性をいづることはできないからである。從て主體が眞に主體であり、外に對して眞に内であるためには、聽取の消極性を脱して、應答の積極性に出るのだからである。應答は然るに主體の内部からその自發性に依て起る。如何に答へるかは主體の自律から出るのでなければならぬ。さうでなければ主體と云つても本質的には外の延長に他ならず、自然の内部へ解消されて行く他ない。一般に唯物論は、その形態の如何を問はず、原理的にかくの如き

立場に立つものに他ならないであらう。主體は應答の自律性に於て初めて眞に主體であり、そして恰もここに主體の實踐的性が成立するのである。

應答は併し固より内容を持たなければならない。ここにイデアの誕生がある。外から呼びかけられた主體がそれに應じてみづからを現すべく自己を自律的に限定したもので、それが即ちイデアである。この意味に於てイデアとは内に於て觀られたる自己の本來の姿であると云ふことができる。外から呼び醒された主體は、かくの如くにして、イデア的自己限定に依て尙內的には止まつてゐるが併し姿ある具體的な自覺に迄高まり、そこに決意的な自己を持つ。イデアはこの意味に於て意志の目的であり、そして目的のかくの如き自律的限定に於て主體は初めて實踐性を獲得するのである。若しこのやうな自律的自己限定がないならば主體は單に受身の狀態に止まり、外からの限定の下に完全に自己を否定されなければならない。主體は常に外からの限定に於て生死の關頭に立つてゐる。死を奪つて生に還す行が先づ以てイデア的限定に他ならないのである。とは云へイデアは主體の單なる自己限定として生れるものではない。かくの如く考へるところに獨斷的觀念論の抽象と誤謬とがある。外からの現實的具體的な限定を媒介とすることなしには、主體は如何なるイデア的限定にも出ることではできず、従て主體はその實踐性を獲得することができないのである。この意味に於てイデアの成立は常に即物的であると云はなければならない。現實の事物に即しないイデアは實は單なる空想的心像に他ならないのである。

ところで形成的表現が應答すると云ふことは本來如何なることであるだらうか。形成的表現主體は現實には常に技術的身體性を有する主體である。道具、機械、組織、制度などを媒介として技術的に働く主體である。應答するのは

もともとかくの如き主體である。かくの如き主體が應答すると云ふことはそれ故形成すると云ふことの他にはあり得ない。技術的身體を自己に本質的なものとして屬せしめてゐる形成的表現主體に取つてはポイエシスから離れてプラクシスは成立し得る餘地がないのである。形成と實踐とは唯抽象的に引き離し得るに過ぎない。所謂實踐理性の決意は、眞に具體的な實踐性の單なる一面的契機を成すに他ならない。たとへばカントの第二批判は意志の自律性のこのやうな抽象性に立ち、その實踐の概念は恐らくそこを一步も出なかつた。具體的な意志は然るに技術的身體と離れない。このことはプラクシスはその本質に於てポイエシスと離れないことを意味するものに他ならないのである。單なる技術が意志の抽象的契機に過ぎないやうに、單なる自律も亦意志の抽象的契機以上には出で得ない。技術と結合した自律が初めて具體的に動く意志である。技術は盲目であり、自律は空虚である。兩者を綜合的に止揚してゐる高次の立場に眞實の主體が成立する。かかる主體の形成的活動が眞實の表現的現實であり、そこに眞實の現在があるのでなければならぬ。具體的な應答が即ち現在なのである。

應答は併しそれがこのやうにして現在となるためには、先づ以てイデアを表現的主體の內的限定として持たなければならなかつた。従てそれは現在に來るべくして未だ來てゐない姿であるのでなければならぬ。ここに形成に對するイデアの原型的性格と、同時にまた表現的主體の未來的性格とが成立する。未來への聯關と云ふことを除いて主體は成立することができないのである。然るにイデアはもともと外を媒介としてのみ成立するところのものであつた。外は併し表現的環境であり、その本質的性格は作られたものと云ふことであつた。外はそれ故過去性に於て成立する。現在はこのやうにして過去と未來との間に立ち、過去から限定を受けつつ逆にこれをイデア的限定の立場から限

定し返すことに依て兩者を相互否定的に媒介するところに成立する。表現的存在はかくの如くにして本來時間的聯關から離れることができない。時間があつてそこへ表現的生命が現れるのではなく、表現的な存在に取つて時間はそれの本質的な契機を成すのである。ここに表現的存在の歴史性が成立する。表現的世界は歴史的世界である。表現の外としての環境はここでは常にその既に作られたものとしての過去の性格の故に傳統的存在として成立する。これに對し未來の方向は主體の自律的限定としてのイデアに向ふものとして常に創造的である。過去と未來とがその方向に於てその本質に於て互に否定的な對立を形作るやうに、傳統と創造とも亦同様に互に否定し合ふ對立でなければならぬ。併し過去と未來とは單なる否定的對立として成り立つものではなかつた。それらは互に否定的に媒介し合ふことに依てのみ成立し得るところのものであつた。否定的媒介の聯關を離れてそれ自體に於て取られては、過去はその過去性を失ひ未來も亦その未來性を失つて單なる抽象的時間に陥るほかない。そしてかくの如き否定的媒介そのものが現在に他ならないのである。過去と未來とを媒介契機とし聯關項とする否定的媒介そのものに他に別に現在があるのではない。二つの對立契機は綜合に於て融合し第三の中性的な何ものかとして現在が結果するのではない。かかるものは同一哲學的同源性に他ならない。兩者は飽く迄否定的對立者であり、そのことが兩者の否定的媒介に依てのみ成立するその相即不離が即ち現在に他ならないのである。現在は過去と未來との辨證法的自同性に於て成立すると云はなければならぬ。それは明かであるやうに例へば圓と直線との切點の如く何等靜止的な相即點であるのではなく、本來互に否定し合ふ兩者の相即點として本質的に動的であり、ここからして現在の本質は應答的形成として成立して來るのである。傳統と創造とはまさしくかくの如き聯關に於て歴史的存在を形作つて來る。現在は實に傳統と創造と

の矛盾的交渉の底から生れるのである。だから眞實の意味に於て傳統に深く徹すると云ふことは却て創造に進むことであり、逆にまた創造に眞に徹底して行くと云ふことは具體的に傳統を生きると云ふことに他ならないのでなければならぬ。創造は常に傳統からの創造であり、傳統は本來創造へ向つての傳統なのである。かくの如き聯關を離れるところでは、傳統も創造も共にその本來の意味を失はなければならない。一方に於ては舊弊、頑迷、固陋などの、他方に於ては新奇、流行、奇抜その他の種々の日常の様相に現れる生活の態度や傾向も、兩者のかくの如き具體的聯關からの抽象態としての單なる保守と單なる所謂進歩との種々の様相に他ならないであらう。

歴史的現在はこのやうにして過去と未來との辨證法的媒介そのものとして成立する。ここでは未來を見ると云ふことは過去を見ると云ふことであり、過去を見ると云ふことは即ち未來を見ると云ふことでなければならない。イデアはこのやうにして傳統の辨證法的否定として本來自己自身への否定的關係として成立するものに他ならないのである。そして過去と未來、傳統と創造とがかくの如く媒介し合ふと云ふことが即ちイデアが實現されると云ふことに他ならないのである。そこに具體的な現在がある。現在はそのから其處に於て歴史的主體が働く恰も其處に他ならないのである。そして個的主體はかくの如き歴史的主體の一々の現實的自覺點であるところに、その存在の本質的意義を擔ふものでなくてはならない。この自覺性の故に個的主體は現實に自由を持つのである。何故なら歴史的な主體が自覺的に實現されると云ふことは、先づ以てこの主體を否定しそこから離叛し得る自由を豫想し、かかる自由が更に否定されることに依てのみ可能となることでなければならないからである。ここに自由の實踐的意義が成立する。實踐的自由はかくの如く否定の二重的構造を有し、これに依て個體の自覺的獨立性が成立するのである。かくの如くにして自由の

このやうな二重否定性に依て個體が歴史的主體の現實的自覺點となるものとすれば、歴史的な主體は個體に取つて自己の本質を意味する普遍者^{*}として成立し、そして個體はそこへ使命づけられ義務づけられたものとして當爲の體驗を通してこれとつながつてゐるものでなければならなくなる。ここからしてかかる普遍者の個體に對する價值性、規範的性格が成立するのである。かくの如き普遍者を自己の本質的原理として持つと云ふことに依て個體の間には必然的に相互の關はり合ひが個體の存在に本來的なものとして成立し、ここからして個體は本來的に社會的存在でなければならなくなる。個體の存在の仕方の上の如く一面に於てそれが共同の本質的普遍にたらなると云ふ契機に於て共同社會的でなければならぬと共に、同時に他面それが自覺的な獨立的存在であると云ふ契機に於て集合社會的性格を本來的に持つものであり、かくして個體の具體的な在り方は共同社會性と集合社會性ととの兩契機の相互の媒介としてその自覺的統一に在るのでなければならぬであらう。

* かくの如き普遍者とは何であるか、人類であるか國民であるか。私はかかる普遍者の具體的なものを世界史的意味に於ける國民であると考へる。如何にしてかく考へらるべきかに就ては併し今は全然觸れない。目下の問題は文化一般の本質に關するに止まり、特に人類文化や國民文化などの考察に迄問題を展開してゐないからである。これらの問題に關しては拙著『國民と教養』がいくらか正面から取り扱つてゐる。

歴史的現在の、——引いてはまた歴史的時間の超個人性も亦、個體の存在の仕方のかくの如き構造に基いて成立すべきことも今は洞察するに難くはないであらう。個體は歴史的現在の、——歴史的時間の、現實的な自覺者であるに他ならないのである。ところが歴史的現在は上述の如くそこに於て歴史的な主體が現實に働くところに他ならず、而も歴史

の主體はもともと形成的表現的であることをその本性とする。さうすれば個體がかくの如く歴史的現在の現實的な自覺點であり歴史的自體の現實的な自覺點である限り、個體の持つ自覺は單なる觀念的自覺ではなく外への形成に於ける自覺であるのでなければならない。個體が身體的存在であることの意義はまさしくここにあるのでなければならぬ。身體は、單なる物理的存在としては勿論、單なる生物的存在としても、その具體的意義を把握することはできない。それは自覺的な技術的形成的存在としての人間の技術的形成的契機であるところにその具體的な意義を有するのである。人間の自覺性は併し歴史的生命的形成的主體としての自覺性に他ならない。だから技術的身體はその本質的な意義を歴史的自體と云ふことに於て持つのでなければならぬ。個體の自覺はその具體性に於てはかくの如き歴史的自體に於ける身體的形成的自覺でなければならないのである。前に明かにした如き價值に對する個體の當爲の體驗やその實踐的自由も、單に觀念的なものであるのではなく、具體的には常に身體的であるのでなければならない。歴史的技術的自體の持つ形成的表現的自由の他に眞に具體的な實踐的自由は成立しないのである。眞に具體的な當爲は實際左様であるやうに常に身體的體驗でなければならない。——文化とは、主體の側から云つて、恰もかくの如き主體の内を外へ形成しただす歴史的表現に他ならないのである。(次號完結)